
勇者 × 5 + 闇勇者 = 世界を救う？

銀河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者×5+闇勇者Ⅱ世界を救う？

【Nコード】

N7666W

【作者名】

銀河

【あらすじ】

主人公夜叉武蔵はある日突然友人5人と共に異世界に召喚された。元の世界に戻るためににとりあえず情報集めも兼ねて世界を救おう。武蔵の波乱万丈な冒険が今始まる！

プロローグ 未来のお話（前書き）

2作目の投稿となります。よろしくおねがいます。

プロローグ 未来のお話

彼女は長年冒険者をしているが、未だにお宝を見つけられないほど運氣が低い。雑魚掃討ミッションでA級の魔物が出現したこともあった。しかしそれでも特別困ったことは無かった。

なぜなら、彼女は幼少の頃から英才教育を受け、今では上級魔法剣士となった。魔法剣士は魔法使いとしての素養と剣士としての素養が両方必要であり、この職に就いている者はそうそういない。

彼女は運氣は未だ最悪ではあるが、他のステータスに関しては、彼女の登録したギルドには並ぶものは居なかった。

つまり、彼女は運氣は低いが、そのせいで出会ってしまった魔物や盗賊よりも彼女の方が強かったのである。冒険者になってから彼女は自分より強い者に、人でも魔物でも出会ったことはない。

彼女は運氣の低さゆえに、敵と出会ったらなにも行動させずに問答無用で殲滅するという戦法をとっている。運悪く、雑魚の適当な攻撃が当たったりしないようにするためである。

そんなことをしていたら彼女は何時しかおにおんな鬼女おにめという二つ名を得ていた。

彼女は不満に思っていたが周りからすればこれほど納得のいく二つ名は無かった。

そんな彼女は自分は誰よりも強い。彼女は今日までそう思っていた。

「ハッ、ハッ、ハッ。」

私は全速力で下草しか生えていない荒野を駆ける。

私はついに出逢った。待ち焦がれていた。私よりも強いモノに。

しかし、この時ばかりは自分の不運を呪った。

ギャオオオオオオオ

私の後ろから私の長年待っていたモノの鳴き声が聞こえる

ソレは体形は、一般的なドラゴンと同じだがサイズは5倍以上の30メートル強。体色は赤黒くて、目は真紅。さらに桁違いな魔力を秘めている。

ソレはドラゴンの上位種、ワイバーン。レッドアイズワイバーン＜赤眼の火龍＞である。子供でも知るSS級の神龍である。

一介の上級魔法戦士では敵うはずが無い。

しかし、私はソレに出会ってしまった。

で、遮蔽物が何一つない荒野で追いかけられているわけである。

剣で何度か斬り付けたが全く刃が通らない。得意の炎系の魔法も使ったがまるで効果はない。

ソレは幾度無く襲い掛かってくる。

逃げて避けて逃げる。

ひたすらその運動を繰り返した。

永遠に続くと思えそうな動きだが、それも何時かは終わるもの。

ソレは魔法で火炎を吐く。そして、辺り一帯の地面を焼き尽くした。

ファイヤーシールド
「炎の盾！」

私は炎で出来た障壁を展開し、相殺させ、火炎を耐える。

しかし私は魔力を一気に消費し、動きが鈍る。

ソレはその隙を見逃さなかった。

強靱な体を捻り、力を溜め、解放し、体当たりを仕掛けてくる。溜めの時間のおかげでなんとか回避するが、それが畏であったことに気づくのは時間は掛からなかった。

その先には魔力の込められた尻尾があった。

「しまった。」

慌てて避けようとするが、腕がかすってしまった。

「ぐはっ！」

それだけで私の鎧は大破してしまった。

尻尾自体のダメージは鎧が相殺したが、込められた魔力が腕を傷つける。

そして私は吹き飛ばされ、地面に強^{したた}かに打ち付けられる。いや、はずだった。

「草^{リーフコート}の守護服！」

何処からか現れた葉っぱが私の全身を包んだ。地面に落ちる衝撃はそれに吸収され、私は地面に転がる。

そして、自分の体を見ると、驚愕した。

誰かが魔法を掛けてくれたのは分かっていた。しかし、私の体を私ではまず着る事のできないような上等な新緑のドレスが体を包んでいたのだ。

それはすぐに魔力が切れたのか元のただの葉っぱに戻る。

茶色い下草しかない荒野に新緑の葉っぱがなんともシユールだった。

「赤眼の火龍に出会うなんてあんた相当運がいいね。」

ふいに声を掛けられた。

声の方向を振り返るとそこには黒いローブを纏った黒髪に黒目の青年と、同じような物を纏った黒髪にオッドアイのエルフがいた。ローブの裾から見える肌は褐色。つまり彼女は闇^{ダーク}の妖精^{エルフ}だということとが伺える。そして青年の上には黒い小鳥が乗っていた。

「何者だ貴様？」

助けてくれたのは恐らく目の間に居るやつらだが、怪しいの一言で纏められるような奴等だったのじゃない。

沈黙が流れる。

私ともう一度聞こうとすると、先に闇の妖精が口を開く。

「くくく主よ、主の名をこの失礼な小娘に言ってやるのじゃ。助けてやったのに礼も言わぬ小娘にのう。」

最後の部分を強調しながら言う。

「偉そうに言うなよ。だいいち魔法を使ったの俺だし。」

主、と呼ばれた方が答える。

「そうだったのう。では妾も魔法を使おう。焼き尽くせ！癒しの炎！」
ヒールングファイヤー

すると私の腕から炎が上がる。おもわず悲鳴を上げるが、熱くは無かった。そして見る見るうちに尻尾が掠った時の傷が回復する。

「えっ！？」

傷を焼いて直す。そんな回復魔法を見たことが無い。普通回復魔法と言うのは光の力で自己修復速度を速めるものである。

「あなた達は何者だ？」

さっきよりは柔らかな物言いだが警戒は怠らない。

「主、他の者達も結構やばいぞ？」

完全に私を無視して黒い小鳥が喋った。つまりこいつは神獣だ。

神獣は人に従う事もあり、人語を操ることができる。・・・黒い神獣を従えているなんて思い当たる限りでは1人しかいない。

もしかと思ひ訊ねようとするがその対象が口を開く。

「やばっ！あいつ等押されてんな。さすがはSS級か・・・」

彼の目線をを追うとすっかり忘れていた赤眼の火龍がいた。そしてその周りを包囲している者達が居た。

その者達は私では歯が立たなかった赤眼の火龍の皮を剣で斬り裂き、私ではまったく効かなかった炎の魔法やほかにもたくさん魔法で攻撃していた。神獣と思われるやつもいて、独自の攻撃を仕掛けていた。

しかしその者達が私よりも強いのは分かるが、それでも赤眼の火龍の方が優勢だった。全体攻撃魔法を多用し、周囲を焼き払う。

私も微力ながら参戦しようと思ひ立ち上がる。しかし、黒い聖獣

に遮られた。

「どけ！鳥！私も参戦する。」

「主の邪魔をするでない。小娘！」

「なあ！？」

確かに実力の及ばない私では戦力にはならないかもしれない。しかし、怪我が回復したならサポート魔法を使うことは出来る。それを邪魔だと言う上に私を小娘呼ばわりするこの小鳥はもしかして・

そこで男が一瞬で魔法を唱えた。

ウインドフェアリーキング

ウォーターフェアリーキングがすち

「暴風に舞え！風の精霊王！大海で泳げ！水の精霊王！雷と共に降

サンダーフェアリーキング

れ！雷の精霊王！【天は怯え、海は荒れ狂い、地は蝕まれる。世界

フェアリーキングストーム

の理を崩す力を！】放て！<精霊王の大嵐>！」

フェアリーキング

フェアリーマスター スペルマスター

「精霊王だと！？しかも精霊使いに呪文使いだ！？ありえん！？」

精霊王との契約なんて聞いた事も無い。さらにこの男は上級職を少なくとも2つ持つ。普通複数の職業持つ場合は魔法剣士などの中間の職業もあるが、戦士や魔法使い等、下級職と他に何かである。にもかかわらずこの男は上級職である、精霊の力を借りる精霊使いと魔法を強化する特別な呪文を使う呪文使いを持っているという事である。

また、詠唱を1秒程度で済ませた事から詠唱高速化のスキルを持つている事が予測される。

ギヤアアアアアア

赤眼の火龍から漏れたのは悲鳴だった。

嵐は赤眼の火龍を風で斬り付け、水を叩きつけ、雷で焼き尽くす。しかし、それでも赤眼の火龍は生きていた。全身は真っ黒に焦げていたが。

「さすがは赤眼の火龍だな。お前に敬意を払って俺自身で止めを刺そう！」

この男を取り巻く魔力が変わった。
さらに黒い小鳥が男に魔力を注ぐ。

「^{アイヤ}全てを燃やし尽くす闇の炎！【天を喰らい、地を貪れ！】<^{ヘル}地獄の炎！>」

赤眼の火龍を黒い炎が覆った。

その瞬間私は彼の正体を確信した。

赤眼の火龍はゆっくり地に伏せる。

彼は

^{ダークフェニックス}

黒い不死鳥を筆頭としたたくさんの神獣を従え、彼を慕うたくさんの人と共に、世界を救った男。

2つ名<歩く伝説>を持ち、闇の力を持つ異世界人。通称闇勇者。

『闇勇者が赤眼の火龍を精霊王の力と黒い炎で一方的に倒した。』

この1件は彼女の口から伝わり伝説となる。

世界を救った後、彼は気ままに旅をしてこういった伝説を各地で作った。

それは後の世まで語り継がれた。

しかし、今の彼はまだ知らない。

なぜなら

物語は彼がこの世界にやって来る所から始まるからである。

ブログ 未来のお話（後書き）

訳が分からないかもしれませんが物語が進むにつれて分かっていく
と思います。温かい目で見守ってください。感想や誤字脱字の指摘
お願いします。

第1話 6人の中学生が異世界へ

俺は天慶学園中等部3年の夜叉武蔵^{やしゃむざう}。親友の大空光^{おおぞらひかる}が剣道の大会があるから応援に来てくれと言うので仕方なく来ている。

「せいやー！」

「ぐはっ！」

「胴1本！それまで！」

光は中学剣道全国大会決勝で相手を制した。

・・・俺は大会が全国大会決勝なんて来るまで知らなかった。光はいつもどっか抜けている天然である。ちなみに光は部長である。

「よっしゃー！」

喜んでいるに光に、選手兼恋人の海風雪^{うみかぜゆき}が駆け寄る。

「おめでとう、光。」

「ありがとう、雪。」

そう、言葉を交わし、お互いに抱き合った。

すると会場のいたるところから殺気が立ち上った。

それも仕方が無いだろう。

学校1のイケメンと美女が抱き合っているのだから。

俺的にはもう少し自重して欲しいと思っているが、本人達に自覚が無いのでどうしようもない。

他の部員もこのバカップルを半ば諦めたように見ていた。

現在、光の家に居る。祝勝会を開くためだ。実は料理は全部俺が作ったぞ。意外にも俺は器用なのだ。

祝勝会のメンバーは俺、光、雪、副部長の五十嵐紫電^{いがらしいでん}、2年の土谷鋼太郎^{ちやこうたろう}、1年の火向風香^{ひむかいふうか}である。

なぜ下級生が居るのかと言うと、うちの剣道部は各学年ごとのリーダーを選出して、レギュラーにしているからである。ちなみに俺は剣道部じゃないよ。じゃあ何故ここに居るかって？俺がみんなを剣道に誘ったからさ。

「僕は武蔵が誘ってくれたおかげでこんな所まで来れたんだ。感謝しているよ。」

「恥ずかしい事真顔で言うな！」

光は昔からの友人で、万能型の人間だったが、天然な所もあり、男子からの僻みが多かったので身を守るように瞬発力を鍛えるために無理矢理入れた。俺は剣が扱えるからある程度鍛えてあげられたしね。

「夜叉君のおかげで私は大切な人を手に入れました。感謝しています。」

「だから恥ずかしい事真顔で言うなって！」

雪はミハーではなく真剣に光に惚れていたからちょっとアドバイスをしてやった。そうしたらこのバカップルが誕生するというわけである。

「貴方が稽古を付けてくれたおかげで僕は剣道を辞めなくて済みました。そこは本当に感謝しています。クスッ。」

「・・・わざとイラつかせてるだろ？」

紫電はもともと剣道部だったがなかなか成長できず、辞めようとしていたので、個人的に鍛えてやった。そうしたら俺の黒い性格が少し移ってしまってもニコニコしている何考えているかよく分からないやつになってしまった。

「せん、先輩のおかげで俺は真人間に戻れましたああ。ぐすつ。」
「泣くな泣くな。それに真人間かどうかは怪しいぞ？」

鋼太郎は喧嘩ばかりしている熱血野郎だったので、叩きのめしてやったらそれ以来俺に懐いてしまった。敵と対峙する時の緊張感が楽しいとか言っていたので、引きこんだ。そうしたらひたすら力で押す戦法ばかりとり、<バーサーカー>なんて呼ばれている。

「・・・ありがとう。」

「もう少しなんか言ったらどう？」

風香は無口で暗くて筋力はないし先輩にタメ口だが、瞬発力が群を抜いている。俺と同じくらいである。重い過去を持ち、いつも一人でいたので声をかけたらその時俺から逃げるとき瞬発力が半端なかったので剣道に向いていると思い、引っぱって来た。彼女も俺に懐いてしまっている。ちなみにかなりの美少女。

本当の俺を知る友人は今の所この5人である。

俺は鎌倉時代から続く夜叉流剣術現当主である。地獄の特訓の末に親父をぶつ倒して当主の座を奪ったのである。剣道部に入っていないのは俺の技が余りにも道場剣術とかけ離れているからである。さらに俺のじいちゃんが天慶学園の理事長なので基本的俺は遣りた放題なのさ。下級生を試合に出したり、部費多めに貰ったり。あまり悪いことはしてないよ。

「折角の料理が冷めちゃうから早く食べようか。」

「武蔵の料理は絶品だからね。」

みんなも頷く。

乾杯のためのビール・・・じゃなくてコーラやジンジャエールを用意した。

「それでは天慶学園剣道部優勝を祝って乾杯！」

「」「」「」「乾杯！」「」「」

その瞬間

足元に黄色い円が描^{えが}かれた。

最初は悪戯かと思ったが雰囲気はやば過ぎた。おもわず飛び去ろうとするがすでに遅かった。俺たち6人を黄色い光が包んだ。

そこで俺は意識を失った。

俺は今温かい布団の中に居る。かなり上等でふっかふかだ。

慌てて布団から飛び去る。なぜこんな所に居るのか？

状況から判断して気絶している内に運ばれたと考えるのが妥当だろう。

「おはようございます勇者様。」

「！」

突然声を掛けられた。

おもわず、仕込み刀を抜こうとするがそれが無いことに気づく。

「武器は一時的に没収させていただきました。敵意はありません。」

声の主はアキバでよく見かけるようなメイドさんだった。外国人だったけど。

「・・・ここはどこだ？」

「それは私からではなく私の主人がお話するのでついて来てもらえますか？」

「・・・わかった。」

少なくとも敵視はしていないみたいなので信じるか。

メイドに連れられ、今まで寝ていた部屋をでる。驚いたことにそこは赤い絨毯が引かれ、壁にはでっかい絵が飾られていた。

その時点では俺は夜叉家の関係でこんな事になったと思っていた。汚い仕事の依頼とかな。

2分ほど歩くとメイドさんが豪華な扉の部屋を指して、ここに主人が居ると言う。

中に入ると、そこには偉そうな顔と服のおっさんと豪華なドレスを着た美少女と甲冑を着こんだ騎士が5人ほどいた。

「なにが起きたか分かってないだろう。全て説明するからそこに座れ。」

偉そうなおっさんが空いている椅子を指している。

人を連れてきておいてなんて言い草だ。でもここで暴れてもしょうがないしな。素直に従うか。

「はい。分かりました。」

「ふふん。見た目は兎も角礼儀は心得ているようだな。」

「・・・(ガマンガマン・・・)。」

「まず名を名乗れ。」

「(人に名を聞くときは自分から・・・)夜叉武蔵と申します。」

「わしはこの国アクトメリアの王であるウイゼフ・ジュ・アルパミツシュだ。ここはお前の住んでいた世界とは違う世界だ。私の娘であり、巫女でもあるこの娘が君達をこの世界に召喚したのだ。」

「はい？(意味不な展開キターー!)」

「信じられんのも無理は無いだろう。レイラ、魔法を見せてやれ。」

「はい、お父様。水は槍と化し、風は冷やせ！<氷の槍>！」
アイスジャベリン

レイラと呼ばれた王女は手を前に突き出すとその先から水を出現させ、それは瞬く間に氷の槍となった。

「!」

これは・・・

「分かったか？」

・・・仕方が無い。認めよう。

「・・・それでなぜ俺はここに呼ばれたのでしょうか？そして元の世界に帰れるのでしょうか？」

後者が1番知りたい。

「異世界の者を召喚したのはこの国に危機が迫っているからじゃ。魔物が世界に対して宣戦布告してのう。異世界の者はこの世界の者より基本的な性能が高いからだ。それと貴様等はこれから勇者という扱いになる。貴様が呼ばれたのは偶然じゃ。」

「え？他にも来ているんですか？この世界に？」

「うむ、貴様と共に居た5人だな。まだぐっすりと眠っておる。」

「そうですね・・・」

「後、貴様にはもう元の世界に戻る手立ては今の所無い。」

「そうですね・・・」

予想通りだ。王様は俺が質問した時いやそうな顔を見せたからだ。
「？怒ったり悲しんだりしないのですか？」

王女が聞く。

「帰れないと言うのなら仕方ありません。俺で出来るのならばこの国の助けになりましょう。」

もちろん嘘だ。何が何でも帰る方法は探し出してやる。まず情報が必要だ。

「うむ気に入ったぞ。ムサシとやら。これから全員この世界の戦い方や知識を叩き込んでもらう。貴様は戦闘は素人か？」

「いえ、俺は俺の世界の一流の剣術を、他の者達はそこそこの剣術を修めております。」

道場剣術はこの世界で通用しない可能性があるからこう言っておくのが得策だろう。

「そうか。それはよかった。戦闘の素人に1から叩き込むのは大変だからのう。貴様が1番強いという事でいいのか？実は召喚の際の眠りは強いほど速くとけるのでな。」

「はい、おそらくは。それと他の者には俺から説明させてもらってもよろしいでしょうか？」

「かまわん。話は以上だ。分からないことは侍女に聞け。」

メイドさんのことか？

「わかりました。」

俺は深々と礼をして部屋を出た。

外で待機していたメイドさんに俺の部屋まで連れて行ってもらった。

「他の誰かが起きたら教えてくれ。王様の許可も貰ったから心配しなくていいよ。」

「分かりました。勇者様。」

「その勇者様っていうのやめてくれないか？」

「お名前を伺っていないので。」

「そうだったか・・・」

「そうかすまない。俺は夜叉武蔵。武蔵って呼んでくれ。」

「分かりました。ムサシ様。私はユーラとお呼びください。それと、ムサシ様にかかっている通訳の魔法はもうすぐ切れますのでこちらをお身に付けてください。」

「そういつてユーラは銀の腕輪を取り出した。

「俺は本来こつちの言葉は分からないのか・・・てゆうか魔法ってそんなことも出来るんだな。で、それは何？」

「＜通訳の腕輪＞という物です。半永久的に持ち主に通訳の魔法を掛け続けます。他の皆さんにも形は違えど同じようなものが配られるでしょう。」

「（そのまんまのネーミングだな）へーそんなものもあるんだ。」

「ちなみに文字に対しても効果があるので、お暇な時間は読書をして知識を蓄えるのがいいかと思います。」

「ん、わかった。後、腹が減ったのだが——」

「すでに用意しております。」

ユーラは何処からかサンドウィッチ的なものを取り出した。

「さすが・・・」

「侍女として当然です。ではごゆっくりどうぞ。」

啞然としている俺を尻目にユーラは消えるように出て行った。

＜アクトメリアの歴史全10巻＞、＜初心者のための魔導書全3巻＞、＜騎士の心得＞、＜法律について＞、＜平民の生活＞を特技の速読で1時間ほどで読み終えた。

その時すでに俺は日常生活に支障が出ないほどの知識を得ていたが、そんなことまだ知らなかった。

結果的に分かったことは、この世界は神が創って、神からしたら人や魔物もすべて平等に見られているらしい。ゆえに神は人と魔物とのいざこざにはめつたに干渉してこないらしい。人は魔物と戦うので精一杯で、大規模な戦争というものは存在しない。強いて言うならこの世界全体で1つの国といったかんじだ。魔法は魔法という概念が理解できればある程度の練習で扱えるらしい。もっとも、中級以上の魔法には取得条件があったりするらしいが。騎士についてだがこれは町を魔物から守ったり、犯罪者を取り締まったりするらしい。それに対抗するように冒険者という存在があるらしいが後に語ろう。この世界では人の命はかなり軽い。犯罪を起こしたら問答無用で処刑もしくは奴隷にするといったかんじだ。平民の生活レベルはかなり低い。魔法で補っている場合もあるがそんなの極わずかだ。

ふいにドアがノックされた。

「ユーラです。他の皆さん全員起きられました。いかがいたしましたでしょうか？」

「俺の部屋に連れてきてくれるか？ 暴れるようだったら俺の名前を出せばいいからさ。」

「すでに来ております。」

ユーラがドアを開けるとそこには5人が居た。

またもや啞然とする俺を尻目にユーナは5人を部屋に入れると、

「ごゆっくり。」

と言って出ていった。

ユーラは思考が読めるのだろうか？

第1話 6人の中学生が異世界へ（後書き）

感想、指摘お願いします。

第2話　ちょっと見せられないステータス

「武蔵、どういう事なんだ？」

「ああ、実は――」

俺は全てを話した。俺の考えも本の知識も。

「皆はどう思う？俺はとりあえずもつと情報も欲しいし、従ってみるつもりだけど。」

「僕は僕が誰かのために何か出来るのならするつもりだな。」

「私は光にずっとついて行くつもりです。」

「僕は色々面白そうなものが見れそうなのでとりあえず従いましょうか。」

「俺は先輩についていきます。」

「・・・私も。」

「じゃあとりあえず世界を救う方向かな。魔法とか興味あるし。」

「武蔵が言うとおりなら基本的に何でも出来そうだね。」

「手からビームとか出せるんですかね？」

「くくく出来るんじゃないですか？」

「・・・くだらない。もつと実用的な魔法を覚えた方がいい。」

「なんだと？てゆうか敬語使え！」

「・・・断る。」

「ムキヤアアア！」

「落ち着け鋼太郎。風香も挑発しないでくれよ。まったく・・・それ以上やるなら見捨てるよ。」

「ち、しょうがないぜ」

「・・・ごめんなさい。武蔵は私の事嫌いにならないでえ・・・」

最後の方はぎりぎり聞こえる程度だ。

「いい子にしていれば天地がひっくり返ってもありえないから大丈夫だ。」

といって頭を撫でてやった。風香は笑顔になる。

「なんで火向ばかり・・・」

また喧嘩が勃発する。

俺は2人に挟まれて身動きが取れない。

ちなみに光と雪は2人だけの世界に突入していた。紫電はその様子をニコニコしながら傍観している。

これが俺と天慶学園剣道部との日常である。

それをユーラは^{サウンドステイル}盗聴>ですべて聞いていた。

「この仲を引き裂くのはつらいですね・・・」

そんな呟きは誰の元にも届かなかった・・・

翌日、ユーラに連れられ6人は神殿という所に来ていた。そこにはレイラ王女が居た。そういえば巫女って言ってたな。

ちなみに5人はちゃんと通訳の装備を着けてきている。

「ここ、神殿ではライフカードというものを発行します。ライフカードというのは筋力、魔力といったものや自分の固有の能力や称号を確認することができます。スキルや称号の詳細はカードの裏に書いてあります。また、これは身分証名書にもなります。さらに、見せたくない部分は消去と念じれば見えなくなります。初回はただですが、失くすと再発行にお金を払わなければなりません。ちなみに私のはこんなものです。」

そう言っただけレイラはライフカードを自慢げに見せる。

レイラ・ジュ・アルパミツシュ

職業：騎士LV20 巫女LV73

筋力：C

体力：D

素早さ：C

魔力：B

知力：C

器用さ：E

精神力：D

運氣：C

属性：光、水、風、氷

耐性：光、闇、呪い

称号：アクトメリア王国第1王女、神殿の巫女

スキル：神仙術、水と風の融合、祈祷

装備：巫女服一式

いいのか悪いのかよく分からない。そんな顔をしているとレイラが不貞腐れた様に、

「一般的な騎士が全部Dです。」
と、教えてくれた。

すごいすごい。と、褒めちぎったら機嫌を直してくれた。少し風香が不機嫌だったのが気になったが。

「それではやり方を教えます。台座の上にカードに1滴血を垂らしてください。後は私がやります。」

だれからやるかと相談した所、鋼太郎、光、雪、紫電、風香、俺の順番になった。鋼太郎がどうしても最初がいいと譲らなかった。『ではやりましょうか。』

鋼太郎が壇上にのぼり、台座の前に立つ。レイラがなにかブツブツと呪文を唱え、カードを置いた。鋼太郎は指を噛んで血を垂らしたすると神々しい光が鋼太郎を包み、光り輝いた。

カードにはちゃんと鋼太郎の能力等が刻まれていた。

土谷鋼太郎

職業：勇者LV1 剣士LV38 戦士LV47

筋力：AA

体力：A

素早さ：B

魔力：H

知力：F

器用さ：F

精神力：B

運氣：C

属性：火、土、鋼

耐性：なし

称号：バーサーカー

スキル：剣道、火と土の融合

装備：通訳の首輪

「・・・・・・・・」

「なんじゃこりゃああああ！」

「いろいろ突っ込み所はありますが、魔法を使うのはきつそうですね。くくくバーサーカーが健在とは。」

「なになに！？狂ったように暴れた狂戦士に送られる称号だ！？ばかなああああ！」

「・・・筋肉バカ。」

「次お願いします。」

レイラが呼ぶ。

次は光の番である。

大空光

職業：勇者LV30 剣士LV63

筋力：B

体力：A

素早さ：B

魔力：A

知力：B

器用さ：E

精神力：B

運氣：A

属性：光

耐性：なし

称号：剣道部主将、中学剣道全国大会優勝者

スキル：剣道、王道、主人公体質

装備：通訳の腕輪

「！」

「王道ってなに？大体分かるけど……」

「えっと……何事にも真正面から立ち向かうと能力UPだって。」

「……すごいのか？」

「光だから大丈夫よ。主人公体質だし。」
「そつか。そうだな。」
次は雪。

大海雪

職業：勇者LV8 剣士LV47 料理人LV1

筋力：C

体力：B

素早さ：B

魔力：C

知力：C

器用さ：H

精神力：E

運氣：AA

属性：水、風、氷

耐性：なし

称号：光の妻

スキル：剣道、水と風の融合、ダークマター暗黒料理生産

装備：通訳の髪飾り

「暗黒料理つて、LV1つて・・・」

「妻ですって？・・・ポッ」

「・・・雪さん運氣凄い。」

次は紫電。

五十嵐紫電

職業：勇者LV1 剣士LV41

筋力：B

体力：C

素早さ：C

魔力：B

知力：AA

器用さ：A

精神力：A

運氣：A

属性：風、雷、嵐

耐性：なし

称号：傍観者

スキル：剣道、風と雷の融合、客観視

装備：笑顔、通訳の指輪

「光より強いですって？このへらへら男が？」

「・・・傷つきますよ？」

「ありえないだろ。」

「戦闘にあまり直結しない所ばかり高いすっね。」

「・・・無駄。」

「傍観者や客観視や笑顔には突っ込んでくれないのですか？」
無視して次は風香。

火向風香

職業：勇者LV1 剣士LV30

筋力：D

体力：D

素早さ：AAA

魔力：A

知 力：A A

器用さ：C

精神力：C

運 気：B

属 性：火、風、炎

耐 性：なし

称 号：トリガーハッピー

スキル：剣道、火と風の融合、

装 備：改造エアガン、通訳の首飾り

実は風香は銃が大好きである。

「・・・偏ってるう（こんなんじゃ武蔵の隣に立てないよ。きっと。）」

「しょ、しょうがないさ。そんな泣きそうな顔をするなよ。」

「火と炎って違うんっすかね？」

「銃が好きなら筋力なんて要らないんじゃ？」

「・・・だまれ。」

風香は常時携帯しているエアガンを引き抜き光に向ける。

俺は風香はなるべく怒らせないようにしようと誓った。

最後に俺の番、いやな予感がする。

夜叉武蔵

職業：勇者LV57 剣士LV89 料理人LV76

筋力：AAA

体力：AAA

素早さ：S

魔力：S

知力：AA

器用さ：SS

精神力：S

運氣：B

属性：闇

耐性：毒

称号：夜叉流現当主、殺戮者、闇勇者

スキル：剣道、夜叉流剣術、肉体操作、記憶半永久保存、脳内演算
高速化

装 備：スローイングナイフ3本、通訳の腕輪

予想通り。皆が見る前に素早く殺戮者と闇勇者を消去した。

「武蔵、なんだよこれ・・・」

「光、落ち込まないで。武蔵は人外だから。」

「相変わらず貴方は面白いですねえ、くくく。」

「さ、さすがです・・・」

「・・・凄い（さすがは私の未来の夫）。」

「気にしないでくれ・・・」

「なんですかこれ!？」

今までなにも言わなかったレイラが悲鳴を上げる。

「・・・勇者LVが高いので一応危ない人ではないと判断します。」

「どういうことだ？」

「各職業はそれぞれに応じた行動をすることでLVが上がります。

私は巫女ですから、巫女として働けばLVが上がります。つまり貴

方は勇者としての行動を行っているという事ですから。」

「あ・・・」

悪の組織をボスから末端組員まで抹殺するのは勇者と判断される

のだろうか。それともこいつらの手助けをしたからか？

「それに皆さんも十分に強いはずです。Aが1個あれば充分ですし

普通はスキルなんて持っていませんから。」

少し恥じらいながら言う。先ほど自分のカードを自慢したことを

悔いているのだろう。

「カードの発行はこれで終了です。今日はこの後は自由時間ですので私が城下町をご案内しましょうか？」

「じゃあお願いしようか。ってえ!？」

突然風香が俺の腕を掴み、神殿の外に連れだされた。

その切羽詰った顔を見て止めるものは誰も居なかった。レイラが

少し不機嫌そうだったのには誰も気づかなかった。

訳も分からず神殿から連れ出されて少し経ってからようやく風香が口を開いた。

「・・・今日一日デートして。」

「え？」

風香は何故か突然とんでもない事を口走る事がある。そのまま俺に抱きついてきた。

「・・・私はもう限界。訳も分からずこの世界に連れられてきて、戦えってそんなの無茶苦茶。グズッ。」

やばい完全に泣かしてしまった。俺に非があるのか分からないがとりあえず泣き止ませねば。

「わかった。どこにでも連れて行ってやるよ。」

そういつて、風香の頭を撫でる。幾分か機嫌を直してくれたようだった。

「でも金がないよなあ」

「・・・いや、ユーラとかいうメイドから受け取った。何かに使える。」

そういつて俺に金貨10枚を見せる。

この世界の通貨には金貨、銀貨、銅貨がある。銅貨が100円程度で銅貨10枚で銀貨、銀貨10枚で金貨となる。

つまり、10万円程度。充分遊ぶことができる金額である。ていうか俺じゃなくて風香に渡すなんて・・・ユーラはこの展開を読んでたみたいだな。まじであいつなにもんだ？

「じゃあ適当にどっか行こうか？」

風香は頷く。しかし、俺の腕を引っ張り、迷いなく一点を目指す。その先は洋服屋だった。おそらく、デートのプランをユーラから託されているのであろう。

「いらつしやいませ！」

中に入るとかなり上等そうな服がたくさん置いてあった。

「・・・武蔵が選んで？」

「え？そんなの俺分かんないよ。」

俺が困っているとお店の人が寄って来た。

「私どもがお選びいたしましたよう・・・失礼しました！」

お店の人は風香の殺気で一目散に逃げていった。

「・・・いい服が着たいんじゃないって武蔵が選んだ服が着たいの。」
「分かった。」

こうなった以上本気で選ぼう。

10分後、候補の3着を風香に渡し、風香は試着している。

「・・・どう？」

風香は緑色のワンピースを着ていた。

「凄く可愛い。」

「・・・こっちはどう？」

次は白いフリルの付いた黄緑の洋服。

「凄く可憐だ。」

「・・・これはどう？」

最後は濃い緑のドレス。

ちなみに風香の好きな色は緑だ。

「凄く綺麗だ。」

「・・・結局どれが一番いいの？」

「ああ・・・決められないな・・・」

結果、全部購入した。金貨9枚だったので残り1枚である。

つぎに向かったのはこじやれたカフェだった。

「何が食べたい？」

「・・・ハイパージャンボパフェ。」

品書きで一番高い、銀貨5枚のやつを指して言う。

風香は実は甘い物好き&大食いである。

「俺は腹減ってないからコーヒーだけでいいよ。」

15分ほど待つとありえないくらいでかい20人前くらいのパフェが出てきた。

「食えんのか？」

コーヒーを飲みながら聞く。

「・・・余裕♪」

そういうと風香は目の前の山を解体していった。

解体時間5分。

巨大な山はたった5分で無くなったとき。

周りの客は驚愕しているが、慣れてる俺は気にも留めず、会計を済ませ、残った金でユーラにお土産を買い、城に戻った。風香が機嫌を直していたのでみんなは安堵したが、お土産をユーラにしか買って帰らなかったで鋼太郎は風香と喧嘩を始めた。その内、光と雪は彼等だけの世界に入り、紫電はニヤニヤと傍観していた。何故かその場に居たレイラは少し不機嫌そうだった。

第2話 ちよつと見せられないステータス（後書き）

誤字脱字の指摘お願いします

第3話 新たなる出会いと仲間との別れ

翌日俺達は魔導具保管庫という所に来ていた。

そこには膨大な量の剣や杖、他にも訳の分からないものがいっぱいあった。

「この魔具の中から好きなものを1つ選んでください。それは冒険を共にするパートナーとなります。」

それだけ言々とレイラは魔具保管庫から出て行った。

何にしようかな？

剣を見たが、元の世界に置いて来た愛刀に勝るものは無かった。

『・・・じゃ・・・』

「ん？」

今誰かに呼ばれたような・・・

声がした気がする方向に行くとそこはガラクタ置き場みたいなところだった。

何か無いかと探っていると、

『・・・つちじゃ・・・』

「！」

確かに声がした。ガラクタを乱雑に退かす。するとそこには古びた魔導書があった。

それを手に取った。すると・・・俺は一瞬で何も無い空間に移動していた。訂正、そこには蒼髪に紫水晶アメジストの瞳を持ち、耳の尖った1人の少女がぼつんと佇んでいた。

「まず自己紹介から始めようか。主。」

「主？」

「ああ、主は妾を永久の封印から救ってくれたのじゃ。妾は主に仕えよう。」

「封印？」

「ああ、昔ちよつとやんちゃしてのう。とある国を滅ぼしたらここ

に封印されてしまつてのじゃ。」

この空間を指して言う。

「封印解除の条件が封印されている妾の声が聞こえるくらい魔力の素養があり、闇属性のみを持つものがあの禁書に触れる事。ちなみに魔力のランクはいくつじゃ？」

「・・・Sだ。」

「Sか。なかなかやるのう主よ。」

「・・・あのさ言つときたいことがあるんだけど。」

「なんじゃ？」

「俺の名は夜叉武蔵。実は」

俺は自分が異世界から来た事を説明した。ライフカードもありのまま見せた。

「なるほどな。おもしろい。ますます気に入ったぞ主よ。妾の名はシルファア。シルと呼んでくれると嬉しいのう。種族は闇の妖精^{ダークエルフ}じゃ。後、妾の存在は絶対信用できる人に見教えてよいのじゃ。知つてる者は知つているのう。」

俺は一瞬フリーズした。＜アクトメリアの歴史全十巻＞にあった記述『この国の前身、アルリアは市民を人とも見ない圧政を行つていたので、1人の女、＜^{ジェノサイドウィッチ}殲滅の魔女＞こと、シルファアと名乗るものに滅ぼされた』を思い出したからだ。

「そうじゃ妾が殲滅の魔女じゃ。今じゃ当時の10分の1程度の力しかないがのう」

「・・・分かった。で、シルはこれからどうするんだ？」

「妾の事は心配する必要はないのう。主が封印を解いてくれたおかげでこの空間は妾の者になった。」

そう言うシルファアは何処から取り出した杖を振るつた。

すると、驚くことに無の空間だったものが瞬く間に花に囲まれたのどかな田舎に変わった。そこには田舎風な一軒屋が建っていた。

「妾はここに住むことにするのう。主とは念話で会話出来るから何時でも共に居ると考えてよいのう。実体化すれば軽い魔法でなら主

をサポートすることも出来るぞ。ただ、魔力を回復させねば実体化は無理だかのう。」

「分かった。戻るにはどうすればいい？」

「戻りたいと願うだけじゃ。それと、現実では全く時間は進んでおらぬからのう。また来たい時は禁書に念じればよいのじゃ。ただし、もつと魔力が戻ってからのう。」

俺は戻りたいと念じた。すると、一瞬で元の魔導具保管庫に居た。『主よ、禁書を読んで見るのじゃ。かなりおもしろいものが見れるぞ？』

シルファアの声が頭の中に聞こえる。

おもむろに禁書を手に取り開く。すると、中には死者蘇生や死者を操る魔法なんかも記されていた。

『妾の書いた本じゃ。ほとんど世界中の魔法が載っておる。世界に1つだけの貴重な本、大切にやってくれ。』

『なんでこんなものを？』

『安心してくれ、主。その本はただの趣味だのう。その中でも外道な魔法は一切使ったことはないぞ。』

『そうか、よかった・・・』

禁書を読み進むと、

『本を閉じる主！』

『え？』

突然シルファアが怒鳴る。

『武蔵、それにするのか？』

不意に声を掛けられた。

そこには怪訝そうな顔をした。光が居た。

「ああ・・・そのつもりだ。」

「確かに、武蔵のアレより強そうな剣はないからそいつのものもあるだね。僕はこれにしたけど。」

光は光り輝く剣を見せつける。

「聖剣シャイニンググライスというらしい。」

「何故分かるんだ？」

「柄に彫ってあった。ほら。」

確かにそこには剣の銘が彫られていた。

『どうした、主？』

『てつきり光の剣にもお前みたいなのが封印されてたのかと思って・

・。』

『それはないのう。妾ほどの力がある者じゃなければ封印せずに殺すはずだのう。』

『そうなのか。』

『基本的に全ての武器、防具に銘はほってあるからのう。』

『そうか、ありがとう。』

俺は禁書を抱えて他の皆の所に行った。

「風香は何を選んで・・・やっぱりそれか。」

それは俺も見かけていた。

風香が選んだのは魔導銃だった。

「・・・うん。改造エアガンなんかより遥かに使えそう。魔力を撃ち出すって書いてあった。私にはびつたり。」

「書いてあった？」

「・・・箱と説明書が付いてた。名を爆殺銃イクスプロジアというらしい。」

「やばそうだな。」

笑顔で爆殺銃を弄繰り回す風香はほつといて次は鋼太郎の元に向かう。

「それはなんだ？」

鋼太郎は刃の無い剣の柄を持っていた。

「せ、先輩。これは念じると刃が出てくるんっすよ。」

鋼太郎が念じると柄から刃が出てきた。

『シル、これはなんだ？』

『空間魔法で柄に刃を収納しておるのじゃ。剣自体はそこその業物かのう。』

『へえこんな事も出来るんだ。』

「先輩、これは玉鋼の暗殺剣というらしくて、仕組みは——」

興奮して語りだす鋼太郎を無視して紫電のところに行く。

「・・・紫電、おもしろいを通り越して近づき難いぞ。」

「そうですか？賢者の輪というらしいです。」

紫電の頭の上に金の輪が浮いていた。

「・・・これは？」

『主の友人はおもしろいものを選ぶのう。これは風魔法で浮いておるのじゃ。装備者が外さない限り浮き続けるのじゃ。代償としてほんの僅かだが魔力を吸い取られ続けるのう。』

「能力は？」

「一部ステータスの強化及び風魔法の強化ですよ。」

紫電がライフカードを見ながら言う。

「あえてそういう際物を選ぶのがお前らしいな・・・」

「いたって真面目なんですがねえ。」

ニコニコし続ける紫電を尻目に最後に雪の所に行った。

雪は小さなお守りを持っていた。

「それは？」

「幸運のお守り。運気のステータス強化と、リフレクション反射という魔法が常時発動するらしいの。」

「魔法の効果は？」

「中級以下の魔法を術者に跳ね返すつんだて。」

雪もライフカードを見ながら言う。

「すごいな。」

10分ほどするとレイラが戻ってきた。

「皆さんもうお選びでしたか。ではこれから皆さんには個人毎に適した師の下で修行をして貰います。」

「・・・え？」

「くくく。」

「・・・やだ。」

「その必要はないだろう。お前も俺たちのステータスは見ただろう

？」

「ええ、もちろん。ただ、実戦経験は少ないのでは？あれほどのステータスならもつと称号が付くはずですから。それに魔法はまだ使えないでしょう。」

「俺には必要ない。現れる！<闇球>！」
ダークボール

俺の手の前には丸い闇の球が現れた。

「「「え？」「」」

「くくく。」

「・・・凄い。」

俺は既に魔法を本の知識だけで理解していた。

もつとも闇は珍しいのか<初心者のための魔導書全3巻>には載っていない、禁書で覚えたのだが。

「・・・闇を平然と扱うなんてやはり貴方は勇者といえど危険因子！皆のものであえ！」

「ええ？」

どこからかわらわらと騎士が湧いてきた。

「危険因子、ヤシャムサシを捕縛せよ！」

ええー殺されたいのかこの王女。实力を見せようとしただけなのに・・・

1人の騎士が俺を捕まえようと素手で立ち向かってきた。

俺は手の上にあった。闇球を投げつけた。それは、騎士を鎧ごと挟った。

反対側から別の騎士が襲ってきた。今度は剣を構えている。

俺は仕込んであった。スロージングナイフを死角から飛ばし鎧の上下の隙間にぶち込んだ。その騎士は腹を抑えてうずくまる。

「そこまでだ！」

声の方向を見ると武器を取り上げられた皆が騎士に大人しく捕まっていた。何故か雪だけは抵抗していたが。

「この者共の命が惜しければ大人しく投稿しろ！」

なんと、風香が捕まるなんて。騎士はみんなDランクじゃなかつ

たけ？

『捕縛^{アレスト}の魔法が掛けられているのじゃ。どうしようもない。雪だけは幸運のお守りに守られたのか。』

「・・・ちっ。」

俺はスローイングナイフを手放した。

騎士達は俺を縄で縛って地下の牢屋にぶちこんだ。

『・・・どうするのじゃ？』

何十分が経ってからシルファアが聞いてきた。

『武器と禁書が盗られてるからなあ・・・』

残っていたスローイングナイフと禁書は取り上げられてしまった。

『禁書は妾が認めた者しか見れないように制約^{リストラクション}を掛けていたから内容は見られることはないのじゃが・・・』

『そんなもん怪しまれて破棄される可能性があるな。』

『そうじゃ。あれは妾の宝物じゃ。どうしても取り戻したいのじゃ。』

『

『じゃあ、とりあえずの目標は禁書の奪還と城外への逃走だな。』

『妾の魔力が回復すれば瞬間移動^{テレポート}が使えるのじゃが・・・主の仲間は大丈夫かのう？』

『苦勞して召喚した勇者だ。邪険には扱わないだろう。じゃあいくぞ。』

肉体操作で腕に全パワーを集め、縄をぶつちぎってそのまま檻を殴り壊した。

肉体操作というのは体のエネルギーを1点に集中させる事。これが出来ないと血縁者でも夜叉流に入ることが出来ないのです5歳の時までに覚えた。

『主はいろいろ規格外だのう・・・てつきり魔法で破壊するのかわかっているのじゃが・・・』

シルファアは呆れているようだ。

『俺もイラついてんだよ。騎士達じゃなくて魔物なら皆殺されていいからな。』

己の油断が原因。仲間の事を考えずに戦っていたからな。

牢屋から出て1階に上がる。するとなんとそこにはユーラがいた。
「どういつつもりだ？」

「レイラ様の行動は間違っていると思いますてせめて逃がして差し上げようと思ひまして伺ったのですが・・・」

呆れたように俺を見る。

「すでに俺は檻を破っていたつというわけか。」

「はい、これを・・・」

ユーラはスローイングナイフ3本と禁書と茶色い小袋を渡してきた。1本のナイフには血が付いていた。あの騎士の血だろう。

「これは？」

茶色い小袋を指して言う。

「逃走資金とライフカードです。」

中を見ると金貨が20枚ぐらいとライフカードが入っていた。

・・・ライフカードの存在忘れてた・・・

「こんな事して大丈夫なの？」

「問題ありません。本来私はお休みの日ですので疑われる道理はありません。」

そうですか・・・

「・・・ユーラが何者なのかは聞かないけどいろいろありがとう。」

「！」

ユーラは息を呑んだ。

「私は元冒険者です。それ以上は言えませんが・・・」

「そうか。最後にお願ひできるか？」

「？何なりと。」

「皆に伝言を伝えて欲しい。」

「なんと？」

「『またな!』って言ってくれ。」

「承知いたしました。我が命に懸けてお伝えいたしましょう。」

「そこまですなくていいけどな。」

俺は禁書を抱え、小袋を腰に提げ、出口に向かって歩き出す。

「ユーラ。」

「はい?」

最後の言葉を告げる。

「——またな!」

「はい、また会いましょう。」

俺はそれだけ言つと出口に向かって駆け出した。

第4話 冒険者になるのと2つの出会い

俺はユーラと別れた後、門番をぶちのめし、強行突破し、今は町を堂々と歩いていた。

すぐに、名前は出てないが罪状と似顔絵付の手配書が回ったので、俺は禁書にあつた魔法、フエイクフェイス偽りの仮面を使って、顔を変えていた。特徴の無い地味な顔と、ここでは主流の金髪に。

ちなみに禁書は普通の魔法もたくさん載ってるぞ？

禁書は目立つので空間魔法無限の収納庫を使って俺だけの空間にしまつてある。かなり便利だな。ちなみにユーラから貰った小袋に入り口を取り付けてある。

町の中を歩いていると、何処もかしこも勇者の1人が失踪した話題でいっぱいだった。闇を扱う勇者だから闇勇者なんていう名前で呼ばれている。称号通りだな。

『主の話題で尽きぬのう。』

『ちよつと恥ずかしいな。』

『これから何処に行くのじゃ？』

『冒険者ギルドに行つて冒険者になろうと思う。』

冒険者とは、依頼を受け、魔物を討伐したり、商人の馬車を護衛したり、指定されたアイテムを取つてきたりする者達である。身分、種族、経歴を問わないので多くの人が冒険者となっている。冒険者であるだけで、出国料が無料になつたりする。

冒険者ギルドは冒険者に依頼を回す組織で、各国に1つ存在する。王家とはいいい意味で敵対する関係となつていて。だからここから俺に関する情報が漏れるのは皆無だろう。ちなみにギルドにはいろんな種類があり、商人ギルドや料理人ギルドなんていうのもある。それぞれにも特典があるのだ。

『着いたぞ。』

でっかく冒険者ギルド>と書かれた馬鹿でかい建物に着いた。

俺はそのドアを開け、建物の中に入った。

中に入るとテーブルに腰掛けていた数人がこちらを見るが、すぐに興味を失った。だって今地味顔だしな。

受付らしき女性に近づいた。

「依頼の報告ですか？」

「いやギルドに来たのは初めてだ。登録を頼む。」

「では、ギルドのルールを説明いたします。」

- 1、冒険者はギルドに害となす行為はしないこと。
- 2、冒険者同士が喧嘩をするときは素手でやること。
- 3、冒険者は依頼人に絶対服従であること。
- 4、失敗を続ける冒険者は場合によっては除名すること。
- 5、以上のことを破った場合、永久除名か、処刑となること。

「構わない。」

「分かりました。ライフカードの名前と職業を最低1つ開示してください。」

「全部じゃなくていいのか？」

「そういう情報を預かって漏らすと大問題になりますから。」

なるほど。俺は名前と剣士のみを残して消去してカードを渡す。

その時カードが色々変わっている事に気づいたが、それは大声で掻き消されてしまう。

「剣士LV89！？ありえないわ！？・・・いえ、失礼しました。」

受付の人は悲鳴にも似た大声でさけぶ。周囲にどよめきが起きる。

「LV89だと？」

「何かの間違いじゃ？」

「あんな地味男がか？」

そんな声が聞こえるが無視する。

「では、ヤシャムサシさん。ライフカードに血を垂らしてください。」

「

親指を噛み、血を垂らす。すると、神殿の時程ではないが、体が光った。

夜叉武蔵

職業：冒険者LV1 剣士LV89 魔法使いLV12 料理人LV76

筋力：AAA

体力：AAA

素早さ：S

魔力：S

知力：AA

器用さ：SS

精神力：S

運氣：B

属性：闇

耐性：毒

称号：夜叉流元当主、殺戮者、禁書の使い手、ジェノサイドウィッチ殲滅の魔女の主

スキル：剣道、夜叉流剣術、補助魔法詠唱破棄、肉体操作、記憶半永久保存、脳内演算高速化

装 備：スローイングナイフ3本、通訳の腕輪、禁書

称号もスキルも増えてんな。．．．ますます人に見せられないなと、いうか親父の野郎俺を除け者にしたな。元当主になってやがるついでに職業：勇者消えてるし。

「これにて登録は終了です。冒険者は依頼をこなすとLVが上がります。なにか質問はないですか？」

「いや、大丈夫だ。」

「じゃあ自己紹介。私はアリアよ。これからよろしくね。ヤシャ君？。」

「いきなりキャラが変わったな．．．」

「今までのはお客様用だから。こっちが本当の私よ。」

「分かった。よろしくアリア。俺はムサシって読んでくれ。」

「ムサシが名前なのね。分かったわムサシ君。早速依頼受ける？」

「いや、とりあえずは登録だけのつもりだったから。」

「そう、じゃあまた今度ね。」

「ああ。」

短い返事をしてギルドを出た。

「次はどうするのじゃ、主。」

「宿を探す。と、言っても決めてあるがな。」

「ほう．．．」

「以前ユーラに聞いてな。着いたぞ。」

ギルドから歩いて2分足らずの所にでつかい4階建ての宿があった。そこにはく冒険者達の家アドベンチャーズホームと書かれていた。通称家ホーム。アクトメリアでかなり有名な宿であるらしい。

中に入ると受け付けには15歳ぐらいの若い娘が居た。

「しばらく泊まりたいのだが・・・」

「は、はい！当店ではシングル素泊まり1泊銀貨8枚となっております！ご飯やお湯は追加オプションという形でその都度払って頂く形になります！」

随分はりきってんな。入ったばかりのバイトかなんかか？

「じゃあとりあえず1泊。」

金貨を1枚出す。

「金貨1枚ですね！お釣りは銀貨8枚でわわわわ！」

チャリンと銀貨と金貨が床にぶつかる音がした。3枚の硬貨は3方向に散らばっていった。

「あわわごめんなさい。」

確定。新入りだ。

「あのう金貨を返して頂けますか・・・」

ちょこまかと銀貨を回収していた彼女は大男に何か言っていた。

「靴の下に金貨があるので足を退けてもらえないでしょうか？」

丁寧に言い直していた。

「だからあ君が落としたんだから君が自腹で用意しなよ。それとも俺に体で払うかい？」

「それは・・・」

状況は読めた。大男が彼女に言い寄っているのだろう。

「またやってるよアイツ・・・」

「振られたからってほんとやなやつだわね・・・」

そりゃ振られるわな。だって大男と小さな15歳くらいの美少女だよ。

大男が少女に言い寄るのはどうかと思うがここは穩便に行こう。不本意だが。

「その金貨は要らない。あんたに恵んでやろう。もう1枚払うから気にしないでくれ。」

あれ。

「なんだとこの地味顔男？」

しまった口がすべった。

『ばかじゃろう、主。』

シルファアがなんか言ってるがよく聞こえない。

「なんか言えよ。言えないのか？口付いてんのか？」

「付いてるよ。非美形さん？」

目の前の大男は間違っても彼女なんて出来そうな顔じゃなかった。

「んだところあ！」

男が殴りかかってきた。

俺がそれを簡単に避けると大男は腰にあつた剣を抜いた。

周囲にどよめきがおきる。

装備から見て恐らくこの大男は冒険者だ。冒険者のルールとして喧嘩はいいけど武器を使ったらギルドから永久除名というのがある。そんなのも忘れてるなんて、そんなに不細工って言ったのが気に障ったか？いや、気にしてたのか。

「おらあああ、死ねえええ。」

大男は剣を振りかぶって突進してくる。めんどくせー！原点に戻って穩便に行こう。

「眠れ！睡眠誘発！」
スリープ

俺の手から白いガスが噴出した。それを吸った大男は派手に転び、強かに頭を打ち付けたがそれでも起き上がらなかった。

「おお！」

周囲から歓声が上がる。

「暴れて悪かったな。」

腰が抜けている受付の娘を立たせてやる。

すぐに落ちていた金貨を回収し、それを渡した。

「は、はい。お釣りは銀貨2枚となります。これが鍵です。さつきまでの勢いは無くなっている。」

俺はお釣りと『201』と書かれた鍵を渡された。

「なにか用事がありましたら受付までお越しください。」
「分かった。」

俺はそう言っただけでその場を去った。

階段を登り、2階にいつてすぐの所に部屋はあった。なかなかいい物件だった。

ベツトは綺麗だし、窓縁まで綺麗に掃除されていた。

『この宿は当たりだな。』

『少しいいか主？』

『なんだ？』

『妾の魔力が戻るためには主自体の魔力が上がるか魔力で満ちた場所に行かなければならないのじゃ。』

『魔力が満ちた場所って？』

『おもに神域と呼ばれる区域じゃ。場所によってはとんでもないバケモノが生息している所じゃ。もしくは神域以外でもありえないくらい大量に魔物が住んでいるような所じゃ。』

『つまり依頼を受けるときにそういうのを考慮してくれてることが？それならかまわんが。』

『察しがいいのう、主。妾は主が好きじゃぞ。』

『ブホッッ突然何を！？』

『妾が実体化して暁には主の初めてを喰ってやろうぞ。』

『勘弁しろ・・・ていうか何故に初めてだと？』

『反応が初心だったからじゃ。若いのう。』

『ぬぬぬっ』

その時誰かがコンコンとノックをした。

『はい？どうぞ？』

『失礼します。』

そう言っただけで入ってきたのはさっきの受付の娘だった。

『あの！』

突然大声になる。

『先ほどはありがとうございました。』

そういうことか。

『ああ、気にしないでくれ。名前は？』

「私はエルシイと言います。15歳です。最近このアルバイトを始めました。」

ピンゴ!

「俺は武蔵夜叉、同じく15歳だ。・・・冒険者だ。」

「ええ? 同い年だったんですか? てつきり20歳くらいかと・・・」
「そりゃそうだ。今の俺は偽りの仮面でそのくらいの年代になって
いるからな。」

「ああ、だから敬語はもういい。」

「分かったわ、ムサシ。で、この部屋はどう?」

「なかなかだ。しばらく厄介になるつもりだから。そのつもりで。」

「ありがとう。後でサービスしてあげるわ。」

「そりゃいい!」

「夕食はここで食べる?」

「ああそうするよ」

「じゃあ今回だけ、銀貨1枚のところを無料で!」

「ありがとう。」

「じゃあ一緒に食堂に来て?」

俺は手を引かれて1階の食堂に行った。

「じゃーん今日は月に1度のアクトメリアスペシャルといって、ア
クトメリアの特産品をふんだんに使っているんだよ。」

彼女が運んできたのは、油の滴るステーキと魚の塩焼き、よくわ
から無い植物のサラダ、パンとどめに青いゼリーだった。

「養殖の暴れ牛バッファローのステーキ、蛇鮫の塩焼き、千年樹のサラダ、麦パ
ン、スライムゼリーよ。」

俺はこの世界では魔物を食うのは知っていた。

しかし、スライムゼリーとは・・・

「スライムゼリーは冷やすと甘くてとてもおいしいよ。当店の一押
しよ。」

「そうなのか・・・」

まず、ステーキを食う。普通にうまい。

次に魚を食った。これもうまい。

サラダもパンもうまい。

でもなにか物足りないような気がする・・・あ、調味料が足りないんだ。

サラダにいたっては何もかかっていないし、塩焼きの塩は少ないし！

この世界ではかなり調味料が貴重である。だから俺にはいまいち合わないんだな。濃いのが好きだし。

さて、最後の難関スライムゼリ！

しかもなぜかエルシイは『あーん』の体勢をとっている。

「あーん。」

ほら！

「いやそれはちょっと・・・」

「あーん」

「そーいうのは恋人同士とかがやるわけで・・・」

「いやなの？」

風香と同じ目をしやがる！泣きそうな目。

俺は覚悟を決めた。

パクツ、ぬるつとした半個体が俺の口の中を通り、胃に向かって行った

「・・・」

これは！

「どう？」

「うまあああ！」

「でしょ？」

「なにこれ！？食べた食感と味のギャップ！喉を過ぎても未だに味を感じる！甘さの中にほのかな酸味が隠れているのもいい！これぞ最高の食材だああ！」

「当店のおすすめだからね。」

「こんな食材に出会えるなんて！もつとくれえええ！」

「はいはい。」

俺はそのまますべてのスライムゼリーを『あーん』して貰った。
『バカップルじゃのう』

「はっ！」

シルファアの声でようやく気づいた。

周りの視線に。あの犬男はすでにいなくなっていたのが唯一の救いだ。おそらく連行されたのであろう。

隣にいるエルシイは何故か満足そうだった。

「そういえばムサシは料理にくわしいの？色々言ってたけど。」

「ああ。」

俺はライフカードの職業の所だけを見せる。

「料理人LV76！？すごい、宮廷料理人並じゃない！」

「ああ・・・俺はフリーだけどね。」

「すごい！今度厨房を貸すから何か作ってよ。」

「いいよ。今度な。」

俺の料理の腕は自分で言うのも何だけどピカイチだからな。器用さSSだし。

きつと満足してくれるであろう。その顔が俺は見たくて料理を作るのだ。

俺はホクホク顔で部屋に戻った。そのままベットにダイブする。

『主は女衤しじゃのう』

昔、光が同じような事を言っていた。

『あのうまさがお前に分かるか？』

『残念じゃが妾は食ったことはないのう。実体化出来たら主に作ってもらおう。』

『スライムをカットしてなんか加えるだけじゃない？』

『気持ちがいもってればそれは料理じゃ！』

それ俺の信条の1つだな。

『分かったよ。』

『おお！では主、楽しみにしておるぞ。』

『ああ、今日はもう寝かせてくれ。』

『ふむじやあまた明日だのう。』

『ああ、また明日』

俺はそのまま深い眠りについた。

第5話 初めての依頼

「おはよう。ムサシ。」

「ムニヤムニヤ・・・はっ？」

俺はベッドから飛び起きた。何故かエルシイが俺の部屋のせまいシングルベッドと一緒に寝ていたのである。

「な、なんで？」

「ムサシが襲ってきたんでしょ？」

「へっ？俺が？」

「そう。私が部屋に来ただけど返事が無かったから合鍵で入ったの。そしたらムサシは寝てたから、寝顔を見ようと思ったんだけど、近づいたらいきなりムサシが布団に連れ込んで・・・」

「わあああそれ以上はいうなあああ！」

「ん？どうしたの？近づいたらムサシが手を握ってきて布団に引張ってきたのよ。どうしても離れなかったから一緒に寝たのよ。」

「へ？それだけ？」

「それだけって何よ。何勘違いしてるのよ。それに男の人と一緒に寝たなんて初めてよ？」

「そっかすまん。」

「じゃあ責任とってよ。」

「責任？」

「私を娶^めとって！」

「ブホッ！？何をいきなり？」

「私は本気よ？ムサシは私を助けてくれたし、私に料理を作ってくれると言った。私はそんな優しいムサシに惚れたのよ？」

そういつて擦り寄ってきた。

「優しいって・・・第一そういうのはお互いをもっと知ってから――」

「妾は主に何人妻がいても構わないのう。」

「・・・悪いが――」

「ごめん！」

突然3人の騎士がズカズカと部屋の中に入ってきた。

「昨日、この宿の1階で騒ぎを起こしたのは君か？」

リーダー格の騎士が言う。

「・・・だつたら？」

「君の相手――ビード・グレンシアと言うのだが、彼はある商人の息子でな、示談で武器を振るつたことを許して欲しいそうだ。」

「・・・ちなみに許さなかったらそいつはどうなる？」

「全ギルド永久除名となる。」

「なるほど。商人には痛いわなあ。考えおくよ。」

「では今日中に商人ギルドを訪れてくれ。」

「・・・」

それだけ言うと、騎士達は部屋から出て行った。

「はあ、ムードが台無しね。」

エルシイはため息をつく。

「それで、返事だが――」

「まだいいわ。確かにお互いの事よく知らないし。しばらくこの宿に泊まるんでしょ？じっくり親交を深めていかない？」

「ああ・・・そうしよう。」

「絶対惚れさせ見せるわ。じゃあ、私は仕事があるから。」

エルシイは出て行った。

思いつかれるは中学生になつてからの3年間。光程ではないが幾度無く告白をされた。光ほどではないがそれなりの容姿だし（今は地味顔だが）、何より強そう。それが彼女等の言い分だった。そんな俺が優しいだつて？

『主は優しいぞ？』

『どこがだよ・・・』

『主は偶然とはいえ妾の封印を解き、妾の正体を知っても受け入れてくれたのじゃ。』

『まあ、普通の人はシルが殲滅の魔女と知ったら無理だろうな。』

『そう、主は優しいのじゃ。』

『でも——』

『話に聞く仲間5人には優しいのじゃろう？』

『うつ・・・』

あの5人には確かに優しいのかもしれない。親友という間柄だからかもしれないが、俺と心置きなく話してくれるのはあの5人と妹だけである。優しくない人とはあんなに気軽に話せないだろう。

『そうだな・・・シル。』

『エルシイとかいう小娘にも優しくするんじゃぞ？』

『全力を尽くす。』

『知ってると思うのじゃがこの世界には結婚に年齢制限はないし、一夫多妻も認められているからのう。』

『俺にハーレムでも築けと？』

『それはいい！主も妾も小娘も幸せになれるじゃろう。』

『はあ・・・』

『話は終わりじゃ！すぐに商人ギルドに行くのかのう？』

『ああ、そうしよう。』

俺は部屋を出て階段を降りた。

受付でエルシイとすれ違った時、エルシイは笑顔を見せた。

それが親愛の情ではないことに何人かは気づいていた。

商人ギルドは歩いて10分くらいの所にあつた。

『お待ちしております。ギルド長がお待ちですのでこちらへ。』

そういつて俺は奥の応接室まで、連れられた。

『この度は息子が粗相を起こしたことを心からお詫び申し上げます。ですから今回の件は・・・』

ギルド長が土下座しかんばかりの勢いで頭を下げる。あいつギルド長の息子だったんだ！

『いや、俺としては被害は被っていないから金が貰えるならかわ

ない。」

「ありがとうございます。それで、幾らほどで？」

「そうだな・・・金貨1000枚。」

「はっ？」

「用意できるだろ？」

「いやその、相場は金貨200枚ぐらいなのですが・・・せめて300枚に。」

「へえ跡継ぎが商人の資格も冒険者の資格も失ってもいいんだ。薄情な親だなあ。」

跡継ぎうんぬんは適当である。

「自分の人生がけちな親父に左右されるなんて哀れだな。」

「・・・お支払いします。」

どうやら当たったようだ。

ギルド長は部屋の隅にあった金庫を開けた。

「金貨1000枚ともなれば1度に運べませんので、いったんこちらに商人という形で登録して預かりましょうか？」

「いや、いい。」

インフィニティポケット

俺は無限の収納庫に金貨を詰め込んだ。

「失礼、空間魔法の使い手でしたか。」

「ああ、それと、商人としては登録しておきたい。俺は商品知識はたくさんあるからな。」

「そうですか、ありがとうございます。それでは受付に向かってください。」

俺はその後受付で商人ギルドに登録し、商人LV1が追加された。

「この後はどうするのじゃ、主。」

「とりあえず装備を整えようと思う。」

「裸同然じゃからな。」

「そういう事。」

俺は来た道を戻り、冒険者ギルドのすぐそばにあった武器屋に入った。

「いらつしゃい！」

「店主、この店で一番強い剣はどれだ？」

「このミスリル銀の剣だ。」

「値段は？」

「金貨100枚。」

「ふむ。」

俺は剣を握ってみる。片手で振ってみるが、いまいち俺には合わない。軽すぎる。

「ほんとにこれが1番か？」

「どういう意味だ？」

「これほど大きな店でこの程度の剣が一番なのか？」

「この程度だと？・・・ふつ、俺が睨んだとおりだ。兄ちゃんこっち来な。」

俺はカウンターの置くに連れて行かれた。

「こっちは一定以上の力の客だけに売るんだ。だまして悪かったな。」

奥には城の魔導具保管庫にも引けをとらないほどの武具が並んでいた。

「これが真正正銘の最強の剣だ。魔剣グニグル。形状は太刀だ。」

「これは！」

「ああ、兄ちゃんの気づいたとおりこれは妖刀だ。触れている者に苦痛を与え続ける。」

グニグルは素で闇属性を纏い、それが鞘から漏れ出していた。

俺はグニグルを手に取り、思い切り鞘から引き抜いた。するとグニグルの纏っていた闇が周囲に放出された。

「ぐっ！」

かなりの痛みが体を走る。

「ゴホゴホ兄ちゃん！まずい！」

店主は放出された闇を吸って咳き込んでいた。触った感じで分かる。こいつは俺の愛刀と同等以上の力を持つ。

最上大業物か、それ以上の存在だ。

「俺に従え！グンニグル！そうればここで朽ちるよりも遥かに面白いものを見せてやる！」

俺の手からも魔力を放出する。それは、グンニグル以上に濃い闇だった。俺の魔力は素で放出すると、完全な闇となるのだ。

「な！」

店主が驚くのも無理は無い。グンニグルは俺の闇と自身の闇で刀身自体が漆黒となったのだから。そして、グンニグルは闇の放出を止めた。苦痛も無くなった。

「よろしくな。グンニグル！」

俺が呼びかけるとグンニグルは少しだけ魔力を出し反応した。

「グンニグルを従えるとは……」

「店主、これはいくらだ？」

「……金はいらねえ。」

「え？」

「俺でもどうしようもねえグンニグルを従えるやつなんて初めて見た。気に入った。そいつは大切にやってくれ。」

「……礼を言う。」

「そのかわり今後も贖罪にしてくれ。うちは魔物の素材も買い取ってるからな。それと、面白いものが手に入ったら見せてくれよ。闇勇者さんよ？」

「！？」

しまった。ばれた？

「闇を扱う人間なんてそうそういないさ。顔は魔法で変えてんだろ？別にちくつたりはしねえよ。お前さんは気に入ったからな。」

店主の目は嘘は言っていなかった。

「そうか。じゃあ今後よろしく。」

「ああ、俺の名はガレイだ。よろしく。」

「俺の名はムサシだ。」

俺達は握手を交わした。

「ムサシだな。ところで、防具はどうするんだ？」

「何かいいものはないか？」

「魔法は使えるだろ？これはどうだ？」

ガレイがとり出したのは黒いローブだった。

「魔銀のローブ。これは魔力を上げるだけではなく、実は裏に魔銀で出来た鎖帷子が縫い付けてある。魔銀に魔力を大量に込めて、大業物でも傷つけられないくらいに強化してある。魔法メインの魔法剣士だと思って斬り込んで来ても傷なんか付けられねえという寸法さ。」

夜叉流剣術には丁度いいな。

「いくらだ？」

「金貨800枚だ。」

「買った！」

「即答か！」

俺は無限の収納庫から金貨を取り出す。

「空間魔法も使えるのか。他にはなにか必要か？」

「装飾品もほしい。」

「呪われた指輪なんかどうだ？ムサシなら扱えるんじゃないか？」

「どんながある？」

「呪われた結界の指輪2個、呪われた身代わりの指輪、呪われた対マジックタイプウォール魔法壁の指輪なんかかな？死神の首飾りもあるぞ。どれも使用者に苦痛を与える呪われた品さ。」

「全部くれ。後このスローイングナイフ10本と旅人必携アイテムセットも。」

「毎度！全部で金貨10枚だ。」

「安！」

「元々呪われてるからな。俺にはどうしようもない品だ。」

代金を渡し、指輪をはめ、首飾りをかけ、従えと念じ、魔力を流した。すると、呪いは解け、グロテスクな見た目だったのが、元の見た目に変化した。呪われた指輪はS級の指輪に、死神の首飾りは

覇者の首飾りに昇華したのだ。

「じゃあまた来るな。」

「ああ、じゃあな。」

「いい店を見つけたのう、主。」

「ああ。」

俺はグンニグルとローブも装備して店を出た。そして、そのまま冒険者ギルドに行った。

「あらムサシ君。依頼を受けに来てくれたのね。」

アリアに声をかけられた。

「討伐系でなんかいいのない？」

この装備の肩慣らしのためだ。

「あるわよ。」

アリアは依頼書を出してきた。

北アクトリアの森の魔物の掃討

依頼主：商人ギルド

目標：下級70頭、中級30頭

報酬：金貨50枚

内容：近々から多数の商隊が北方面からやってくる。もちろん護衛も居るが、念のために魔物を減らしておいて欲しい。

「冒険者レベル1の仕事じゃないね、受けるけどさ。」

「気にしないくじゃあここにサインしてね。」

依頼書の一番下にサインした。

「北アクトメリアで出てくる魔物は主に5種類。下級はスパイダーニードル、ロープモンキー、人面樹、ウッドゴブリン、中級は野生の暴れ牛^{バッファロー}ね。もちろん他にも魔物はあるけどね。討伐証明部位として眼とか耳とか角を持って帰ってきてね。」

無限の収納庫で死体は全部持って帰るつもりなんだけどな。

「ありがとうじゃあ行ってくる。」

「え？1人？募集しないの？」

「ああ、問題ないだろう。」

「やっぱり凄腕なのね。」

「まあな。」

俺は北アクトメリアの森に向かった。

30分ほどかかって到着した。ちなみに俺には瞬間移動^{テレポート}は使えない。まだ時空魔法という概念が理解できないからだ。空間魔法は先に実物見たからすぐできたけどな。

「主、何かおかしいのじゃ。」

「ああ、魔物がみんな怯えてる？」

今まで会った魔物はみんな俺を見ると逃げ出した。

「ああ、グンニグルのせいかな。」

グンニグルは申し訳なさそうにして魔力を下げる。グンニグルの魔力に怯えて魔物は近づけないのである。

今の所10体ほど逃げていくところをスロージングナイフで仕留めたが効率が悪い。

「主、魔法を使うしかないのう。」

「そうだな。呼べ！魔物^{モンスターフェロモン}寄せの香り！」

俺が魔法を唱えるとどこからか知らんがわらわらと魔物が現れた。スパイダーニードルは毒針のついた尻尾を振り回してきたので寸断し、そのまま腹を切り裂いた。ロープモンキーは尻尾を使ってツタで出来たロープを振り回すので、尻尾を斬り落とし、そのまま頭

を切り落とした。人面樹は木に擬態して襲い掛かって来た所を張り倒し、根を残らず切り落とてやった。ウッドゴブリンは小さな角ごと顔を蹴りとばし瞬殺！体当たりしかできない雑魚だった。暴れ牛はなかなか手強かったが、突進してきた所をかわして、後ろから背中を切り裂いた。他にも小人の緑男とか、小型の幼竜、^{グリーンマン}リーフドラゴン、葉竜なんかもいたけど瞬殺だった。

討伐数はクリアしたがまだまだ魔物は居たため、規定数の2倍ほど倒した。計200体。

『さすがにちよつと疲れたな。』

『改めて主はバケモノだということを実感したのう。』
シルファアがあきれている。

『俺はまだまだ全力をだしてないぜ？必殺技の1つも出してないんだし。』

『さすがは妾の夫かのう。』

『・・・』

その時だった。1筋の風が俺を襲った。

「ぐっ！」

『主！』

それは風を纏った矢だった。ロープを貫通はしなかったが、衝撃が体を貫いた。その衝撃はS級身代わりの指輪を粉碎させた。それほど高威力だったのだろう。ダメージは指輪が相殺してくれた。

矢が飛んできた方向を見ると、そこには奇襲が失敗して驚く男がいた。

「なぜ刺さらないんだ？バケモノめ！」

男の最大の攻撃だったんだろう。かなり動揺して逃走を始めた。その背中に俺はナイフを投げつけた。しかし、それは見えない風で弾かれた。

『風の障壁か。他にも仲間がいるみたいだな。』

逃げている男は魔法を使っていなかった。

『俺の機嫌を損ねるとどうなるか教えてやらなければな。』

『油断は禁物じゃ、主。』

『ああ。』

俺はナイフに闇の魔法を込めて投げた。

また、弾かれるが、魔法は発動し、不可視の風の魔力を伝わって術者に闇のダメージを与えた。

インフェクシオンダーク

それは伝染する闇。闇が魔力を喰らい伝染する卑怯極まりない魔法である。全体攻撃だからパーティではまず使えない。後、魔力を結構使うから連発はできない。

「ぎゃあああ！」

かなり遠くで悲鳴が聞こえた。安全なところから攻撃するチキン魔術師だったか。

未だ逃げ続ける男にナイフ3本放った。それは今度は弾かれることなく、男の背中と腕と足に突き刺さった。

「畜生！」

男は這って逃げようとする。

もう1本ナイフを刺す。今度は尻に。

「ぎゃあああ。」

「さて、なんで俺を狙ったんだ？」

「お、俺は盗賊だ。ただそれだけだ。」

「嘘こけ。拷問されたいのか？」

「・・・」

「黙秘か、仕方が無い。魅せろ！<永遠の悪夢>！」
ナイトメア

「あああ！？」

男の悲鳴が森中に響いた。しばらくしてから永遠の悪夢を解除する。

「しゃべる気になった？」

「・・・ちつ、俺達は殺し屋。依頼人はビート・グレンシアとその親父だ。商人ギルド長の。」

「やっぱりな。」

スリープ

男を睡眠誘発で眠らせる。しばらく散策すると気絶している魔術

師がいた。こいつも

ちゃんと眠らせておいた。死体と殺し屋達を無限の収納庫にいれ、俺は全ての蹴りをつける為に帰った。

第6話 商人ギルドの陰謀&王宮サイド

「え！？そんなことが？」

ギルドで討伐証明部位を見せ、報酬を受け取った後、殺し屋2人を突き出した。そしてアリアにことの顛末を伝えた。

「そういうことで商人ギルドに行つて来る。すぐに騎士に連絡してくれ。来る前に蹴りはつけるがな。」

「・・・穏便にしてね。」

「善処する。」

冒険者ギルドを出てとりあえず商人ギルドを目指す。

『どうするのじゃ？』

『んー殺しとく？』

『・・・主は抵抗がないのかのう？』

『いや、むかついた相手は徹底的に、が俺の信条の1つ。』

『しかし主はあまり目立たない方がいいのう。仮にもギルド長じゃぞ』

『そうか・・・じゃあ、あくまでも、悪事の露見ですませてやるか。』

俺はあの親子に正義の鉄槌をくだそう。間違えた、俺のは闇の正義だ。

俺は商人ギルドに潜入する。

「ステルス透明化！」

無詠唱で、透明化を使い、難なくギルド長室へ。

すると中から声が聞こえた。

とりあえず、声を記憶する録音サウンドセーブを唱える。

「報告はまだなのか？失敗したのか？」

「雇ったものはそれなりの手だれ、よほどのことが無い限り、魔法で成否ぐらいは伝えるだろう。」

「生かして帰ってきたら先日のお礼をたっぷりしてやる。俺の女もあ

「いつに盗られたんだからな。親父。」

「金貨1000枚は絶対に取り戻したいな。」

証拠ゲット！

ドアを蹴破つて中に入る。

「き、貴様！」

「やあ、これから人生の敗者となる者達。」

「なんだと？」

ビートが剣を抜く。

「捕らえろ！<捕縛>！」
アレスト

ビートは剣を構えたまま動けなくなった。

「轟け！<雷球！>」
サンダーボール

ギルド長が杖を振るって雷球を放ってきた。しかしそれは、俺の前で掻き消える。

「対魔法か！？」
アンチマジック

「ご名答！捕らえろ！<捕縛！>」

「ぬー！」

ギルド長も動けなくなる。それでも2人とも抵抗しているからナイフを1本ずつ刺しておいた。

「所詮は商人か、さて、どうしようかな？」

「ぐ、ぐ、私達が刺客を送ったっていう証拠があるのですか？」

「おいおい、すでに自白してんぞ。」

俺は今まで録音したのを聞かせてやる。すると、2人はあきらめて、うなだれたようになる。もっとも捕縛してるからうなだれる事すらないけど。

俺は後からやってきた騎士に録音を聞かせ、宿に戻った。

「不完全燃焼だな・・・」

「どうしたかったんじゃ？」

『ぶつ殺して金巻き上げて悪事ばらしてこれから商人関係のいい仕事は全部俺に回ってくるように・・・』

『鬼じゃあああ！』

『そういえばさ空間ってさ、永久にそのまま物を保存できたりする?』

『何じゃ突然?』

『いいからさ。』

インフィニティーポケット

『無限の収納庫は入れたいものだけ入れられるから、空気を出す、とかすれば生ものも保存できるのう。魔物の死体が心配か?』

『ああ、ちよつとまつてよ。』

俺は無限の収納庫をいじって魔物の死体を保存した。

『たぶん、この量の魔物は一度に買い取れないと思うんだよね。』
『そうじゃな。』

『なるべくガレイの所で売りたいからな——』

コンコン、俺の部屋を誰かがノックした。

『エルシイよ。入っていい?』

『構わんが?』

『おじやまするね。あ、装備変えたのね。』

『何か用?』

『つれないわね・・・実は依頼したいの。食材の調達、野生の暴れバッファ牛の肉よ。』

『・・・』

なんてタイムリーなんだ。

『だめ?』

『いや、そうじゃない。偶然というものに驚いて・・・』

『?』

『こういうこと。』

俺は無限の収納庫から暴れ牛を1匹取り出した。

『え?』

エルシイは目が点となる。

『ムサシは空間魔法を使えるの?それに傷が1つという事は暴れ牛を一撃で仕留めたの!?そんなすごい冒険者だったの?』

『ライフカード見せたじゃん。冒険者にはなつたばかり。』

「料理人のとこしか見てなかったわ・・・」

俺はもう1度職業の所だけ見せる。

「剣士LV91!？」

魔物200体と殺し屋を倒したからLVが上がったのだ。ちなみに冒険者はLV31になった。

「今回の依頼で90台になった。」

「じゃあお祝いしなきゃ!それにこの調子ならもうすぐ転職するんでしょ?すごい!」

転職とはLV99になった職業を格上の職業にすることだ。

「うつ・・・」

俺にはできない。なぜなら転職の儀式は神殿で行うからである。神殿の中では一切の魔法が使えないのである。つまり、偽りの仮面フェイクフェイスが解除されるからである。

「ま、そのうちな。」

「とりあえずお祝いしましょ!ムサシも調理手伝ってくれる?」

「ああ、約束だからな。」

2人で暴れ牛を持って厨房に向かった。

——その様子を監視している者がいたなんて誰が気づけただろうか?

その頃城の謁見の間では問題が起きていた。

「僕は武蔵が戻るまで何もしません。」

「私もです。」

「同感ですね(面白くないですし)。」

「同じくです!」

「・・・武蔵に謝罪しろ。」

5人はそろって王家に反抗していた。

「ぬぬぬ！身分をわきまえろ！貴様らは我らに従っていいんだ！それにあんな危険因子殺されなかっただけありがたく思え！」

王、ウイゼフが怒鳴った。

「僕はあなた方が間違っていると思います！」

「私事です。武蔵に謝ってください！」

「一応彼は私の恩人ですのでそれを貶す発言は撤回してください。」

「もう先輩を除け者にした連中に手を貸す必要はないっす！」

「・・・ぶっ殺す！」

5人は殺気立った。

「みなさん、お待ちください！」

レイラが叫ぶ。

「ムサシさんは勇者であることは出来ないんです。あれはもはや魔物側です。彼の人柄がいいのは分かっています。でも、でも・・・」

「・・・言い訳はそれだけ？」

「え？」

風香は爆殺銃をレイラに向けた。

「・・・勝手にそっちの都合で呼んどいて危険だからさよなら？ぶざけんじゃないよ！装填！」
リロード

「なにを！？」

慌てて護衛の騎士がレイラの前に入る。

マジックバリアタイプシールド

「対魔法盾！」

「・・・消える。発射！」
バースト

爆殺銃から放たれた弾丸は魔力のシールドに激突し、爆発した。

「ぐはあああ！」

弾丸はシールドを用意に砕き、騎士を吹っ飛ばした。レイラは辛うじて当たらなかったが腰を抜かしていた。

「私だつてあんなことはしたくなかった。でもお父様が闇を覚えたら処刑——」

「レイラ！」

「・・・貴様が根源か。姫の命が惜しければ武蔵に謝れ。」

「ひっ!？」

風香はレイラに銃口を向けたまま言う。

「誰がそんなことをする——」

「・・・装填!」

「おい、風香やりすぎだ!」

光が止める。

「王様?」

「な、なんじゃ?」

ウイゼフは戸惑っている。

「あなた方が武蔵に敵対するというならば、僕らはあなた方を敵とみなします。いいんですか?」

光は笑いながら言う。

「それは・・・」

「武蔵を連れ帰り、謝罪してください。」

「ぐぐぐ・・・分かった。今すぐ手配書を撤廃して、居場所を探らせよう。」

「ありがとうございます。」

「仕方が無いからな。ではその代わり、予定通りそれぞれに適した師の下でこの世界の戦い方を学んでもらう!」

「・・・分かりました。」

「・・・私はいい。」

「風香!空気を呼んで・・・」

「・・・これ以上武蔵に会えないなら死んだ方がまし!それに貴様らは信用できない。私自身で探す。」

風香はそっくり捨て城の外に向かって歩き出す。

「貴様最初からそのつもりで——」

風香は呼び出されてきたとき、荷物を全て持ってきていた。

「装填!発射!」

風香は10発ほど弾丸を天井に打ち込んだ。それは着弾と同時に瓦礫と土煙を作った。

「取り押さえる！」

王は声を荒げて叫ぶ。

しかし煙が晴れた後に居たのは王と王女と騎士だけだった。

第7話 料理と情報

胡椒20袋、塩30袋、黒砂糖50袋、唐辛子的なもの10袋、醤油っぽいエキスが出る木の实30袋、油10? e t c . . . 。これは俺が3日かけて買い集めたものである。ちなみに1袋は5kgほどで市場に出ていたものほぼ全てを買いあさってきた。総費用金貨200枚ほど、この世界調味料めっちゃ貴重で高いよ . . . 。エルシイに連れられ厨房に着いたが、調味料が冒険者の家にはほとんどなかったので市場で買い集めたというわけである。

『主はいつたい何をするつもりなのじゃ?』

シルファアの疑問もあたりまえである。この世界では調味料はほとんど使わないのである。

『見てろよ! いずれシルにも食べさしてやるからな。』

『異世界の料理かのう . . . 楽しみに待っているのじゃ。』

それらを無限の収納庫にしまい、宿に帰った。

「宮廷料理人並みの腕前、期待してるわよ。ムサシ。3日も待ったんだからね。」

「任せておけ!」

俺はまず、暴れ牛を解体した。暴れ牛は凄く上質な肉で、生でも美味そうだった。俺はそれを一口サイズにして、塩、胡椒で味付けをして、それらをレアで焼いた。次にロースモンキーとウッドゴブリンは肉には臭みが強く、食べられそうに無いが、内臓は食べられそうなので暴れ牛の内臓と共に、モツ煮込みにした。スパイダーニードルは油でかりっと揚げ、塩をまぶし、醤油につけて食べるようにした。人面樹は葉っぱをサラダにして、作ったドレッシングをかけた。体は薪にすると、凄くよく燃えてびっくりした。他にも葉竜のから揚げ&鱗のサラダなんかも作ってみた。

あまりにも量が多かったので、女将さんや、従業員を呼んでみんなで食べた。

「なにこれ！？こんな美味しいもの初めて食べたわ！」
と、エルシイ。

「見たことも無い調理方法に驚いたが、なんて美味いんだ！」
と、宿の従業員。

「なんであんた冒険者やってんの！？」
と、女将さん。

「気に入ったようでよかった・・・」

この世界では濃い味付けでは美味いと感じないかもしれないと考えていたからである。

「さすがはLV89だわ・・・」

「LV89！？俺なんか35だぞ・・・」

料理人とおぼしき壮年の男は呆然とした顔になる。どうやら宿の料理人の心を折ってしまったようである。

「俺の故郷では食文化がさかんなのさ、アハハハ」

慌ててフオーするが遅いようだ。

「ムサシ凄い！もっと作ってよ！」

エルシイに抱きつかれる。エルシイはその柔らかな双丘を押し付けてきた。

「ぐぐぐやめてくれえええ！」

料理人は未だ呆然とたたずみ、女将さんやほかの従業員は得心がいったという顔をしている。

「女将さん、見てないで助けてくれ！」

「ムサシ君だっけ？」

「ああそうだけど？」

「その子を頼んだよ！」

「なんでだあああ！」

俺は宿を飛び出した。

俺はガレイの武具屋に逃げ込んだ。

「ようムサシ。」

「・・・魔物の買取を頼む。」

「おう、何をだ？」

無限の収納庫に入っている魔物の数を教える。

「・・・化け物め。ほんとにそれだけの魔物を買収取れると？」

「無理だな。高い部位だけ買い取ってくれ。残りはそのうちな。」

「・・・分かった。暴れ牛は角と心臓、スパイダーニードルは眼と

俺は言われた部位のみを取り出す。

「全部で金貨2500枚だな。」

「・・・はっ？」

「この世界に来たばかりのムサシには分からのだろ。例えば俺の店で暴れ牛の角を売ったら1本金貨10枚ぐらいだ。」

「マジ？」

「マジだ。他の部位も含めればおそらく金貨3200枚ぐらいだ。」

「・・・とりあえず受けとつてもいいか？」

俺は金貨を受け取る。

「色々買っていくぞ。」

「ああ、そうしてくれ。」

「S級身代わりの指輪が壊れたからなにか代用品を――」

「なんだって！？どんな強敵と戦ったんだ！？」

俺は襲ってきた殺し屋の特徴を説明した。

「・・・おそらくそいつらは双風の暗殺者と呼ばれるやつだ。賞金付きだぞ？」

「へーいくらぐらい？」

「・・・金貨5000枚。」

「はっ！？あんな雑魚が？」

「雑魚か・・・あいつらは片方が風を纏った矢でどんな標的も一撃で殺し、もう片方が見つからない所遠距離で魔法を使い、確実に逃

げ切るといふ戦法をとるから術者の方は未だ顔も割れてないやつらだぞ!？」

「・・・後でギルドに行こう。」

「ああそつしな。話を戻すが身代わりの指輪は今が無い。」

「そうか・・・」

「でもいろいろな情報を仕入れておいたぞ。」

「例えば？」

「召喚の魔法についてなにか知っているか？」

「いや。」

禁書には召喚魔法は何も載っていなかった。シルファー曰く、
『妾の居た時代より後に造られたと考えるのが妥当なのじゃ。』

だそうだ。

「異世界から召喚する魔法は膨大な魔力を使用する。だから、人間の魔力では全然足りない。だから、生贄を使つたらしい。」

「生贄だと？」

「SSS級の神獣、フェニックス不死鳥の子供を聖域から攫つて、魔力の足しにしたそうだ。」

『不死鳥か、妾は会つたことがないのう。』

「・・・」

「不死鳥は召喚に長けた一族だ。住んでいるところは聖域、不死の火山だ。」

「ありがとう。会いに行つてみる。情報料はこれくらいか？」

俺は金貨100枚ほど渡す。

「多いわ! まああり難く受け取るがな。呪われた指輪は他の店からたくさん仕入れといたから全部ただで持つてけ!」

「いいの？」

「金貨100枚も貰つたからな。」

俺は呪われた指輪は結界が1つ、対魔法壁が1つ、対魔法盾が3つ、よく分からないのを1つ貰つた。

「これは別料金だがどうだ？」

俺は魔銀のフードとズボンと手袋と靴を買った。総費用2500枚だった。

「ホントに買ってくれるとは……」

ガレイは俺の金遣いの荒さに少々呆れているようだ。

「不死の火山ってどこにあるの？」

「この国の北側、北アクスメリアの森を抜けて、1週間ぐらい北に歩けば着くぞ。」

「じゃあ行つて来る。」

「……マジか？」

「マジだ！」

俺は店を出て宿に戻った。しばらく出かける旨を伝えるために。そのとき、宿ではなく冒険者ギルドに寄っていれば大きく運命は変わったであろう。

冒険者ギルドには勇者5人が匿われていたからである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7666w/>

勇者 × 5 + 闇勇者 = 世界を救う？

2011年9月23日05時57分発行